浮世絵を中心とする古典籍・版画の流通研究

書物と絵画プロジェクト
赤間　亮、金子貴昭、倉橋正恵、斎藤千恵、松岡　亮

Abstract: In this project, we are using new technologies of digital information, so that we are able to make a huge database about published books and prints in a couple of years. The leader of this project, Akama, has made a biggest database of Japanese wood block prints in theater museum in Waseda University. He also has collaborated to make an Ukiyo-e database of the central library in Tokyo. These are the best example to talk about the purpose of the project. At this time, the leader is digitalizing a huge mount of Japanese prints in Victoria and Albert Museum in London. The museum has over 40,000 prints in their prints store. We will finish making database in the three years time. We can do it with the other researcher on the web site easily. We expect that this kind of research technique will make a revolution in the human science as well.

1、浮世絵の流通と研究状況

このプロジェクトの直近の研究テーマである海外流出した浮世絵から始める。

日本を代表する絵画は、浮世絵である。海外での評価は間違いなく、そういえる。それは何故か。かつて海外に大量の浮世絵が輸出され、現在では、日本国内より数多くの、また名品と呼ばれる浮世絵作品を容易に鑑賞することができるからである。大量に輸出されるに至った理由は、おそらくはさまざまな説明をつけることが可能だろう。西洋絵画とは一線を画する独特の印象をもつ浮世絵が、ユーラシア大陸の東の端にある島国日本への未知の社会への興味とともに、エキゾチックなものを好むヨーロッパの人々に歓迎されるものであることが、明治期になって気づかれて以降、日本の欧化志向の中で海外との交易を生業とする美術貿易商によって大規模な輸出が敢行された結果である。

浮世絵の研究は、そのため海外で盛んに行われてきた。日本での学術的研究は大正期からスタートしているが、本格的に学術分野として定着するのは、江戸時代文化の他領域とおなじく、戦後になってからである。しかし、これまでは浮世絵研究は、科学的な研究ではなく、趣味の世界と言われてもやむをえないところがあった。

ところが、十年ほど前から、科学的な所在調査が進みはじめ、研究発表・研究論文においても伝存実数に対する調査資料数の割合が極めて高いものが現れ始めた。さらに化学系のツールを使った絵の具の分析など、“科学的な”レベルの研究が生れている。にもかかわらず、研究対象はなおかつ浮世絵の前半期に偏っており、その残存数の大部分を占めると思われる寛政から明治期の研究は、十分に整えられているとは言えない。本研究は、この空白期の研究の基盤を作る重要な基礎研究であると位置づけられるだろう。

2、浮世絵の収蔵状況

浮世絵の原資料の所有数は、現在もなお日本国内の方が海外への流出数にくらべて多いかと淡い予想を立てているが、著名なコレクターはいうまでもなく、アメリカのボストン美術館、シカゴ美術館、英国の大英博物館、フランスのギメ博物館など、海外の大規模なコレクションに関しては、枚挙にいとまがない。日本においては、最大

保有博物館が日本浮世絵博物館の約10万点、早稲田大学演劇博物館の約45000点、阪急学園池田文庫の約25000点、都立中央図書館の約20000点が著名であるものの、海外ではボストンミュージアムが60000点以上、ヴィクトリア＆アルバートミュージアム（エジンバラ分配資料も含む）では、約40000点、大英博物館も約20000点といわれている。日本では、ほとんど知られていないコレクションでも、ウェールズ国立博物館の約4000枚、ドイツのリュールコレクションに約4000枚など、日本であれば大規模収蔵機関に仲間入りするコレクションは各地に存在している。そのため、海外の浮世絵研究は、単に活発であるというだけでなく、膨大な資料を背景に、日本よりも高水準の内容を保つことになった。しかしながら、日本人による海外資料の調査は、これまでこれら大規模所蔵機関については、部分的にしか行なわれてきておらず、全貌解明という意味では、まだ調査がほとんどされていなかったというのが実状である。

3、ヴィクトリア＆アルバート博物館所蔵浮世絵

ヴィクトリア＆アルバートミュージアム（以下、V＆A）は、世界でも最大規模の博物館の一つとして著名である。日本の分野についても、服飾、工芸、絵画を中心として大量の収蔵品を誇っている。なかでも浮世絵は、肉筆も含めると現在約35、000枚を越えると言われている。当該コレクションは、1886年に、まったく分類整理の行なわれていない約4万枚の浮世絵コレクションを、当時の英国政府が一括購入し、当ミュージアムに納めたことに始まる。その内、現在は、約5千枚が、イングランドのスコットランドに対する懐柔政策として、エジンバラのナショナルミュージアムに移管されているが、この世界最大規模の浮世絵コレクションは、あまりに膨大であるため、大きな図録しては、「秘蔵浮世絵大観」2冊分として本コレクションが紹介されているにすぎず、ほとんどの作品は、いまだ未紹介のままになっている。また、残念なことに当博物館では、浮世絵を管理研究する極東部門に十分な人的余裕はなく、その価値はよく知られていながら、今後近い将来に整理公開が推進される予定はない。

ようやく定着してきた浮世絵の“科学的な”研究のためには、極めて重要な位置付にあるV&A所蔵浮世絵作品（ならびにそのセットにあたるエジンバラ・ナショナルミュージアム資料）の全貌を明らかにし、正確なカタロギングによって、科学的な浮世絵研究の資料的な基盤を確立させる必要がある。

1886年にV＆Aに納められた浮世絵資料は、浮世絵が輸出されはじめた極めて早い時代に、なんらジャンルや絵師の特定せず、大量に購入されたものであり、江戸期から明治期にかけての浮世絵の流通実態をほぼ如実に反映している。こうした、研究者やコレクターの特定の意図が入らない生の大規模コレクションは、本コレクションが世界で唯一であり、数の上での理由からだけでなく、カタロギングによる浮世絵残存状況の実態調査が急がれている資料群でなのである。

4、調査方法の特徴

上記の如き価値を有する資料群であることをヒアリング等により確認したうえで、本プロジェクト代表である赤間は、2003年4月から調査に入り、2004年3月までにほぼ、そのほぼ半数の浮世絵について、デジタル撮影を進めた。2004年度中に、V＆A収蔵品については、デジタル撮影が終了する見込である。デジタルカメラは、約3000×2000picelの解像度を持ち、研究用あるいは、A4サイズまでの印刷用に適した画質である。撮影技術については、ここでは詳しく触れないが、歪みを極力抑える方法をとり、また2004年度以降は、撮影後に歪み補正が可能な技術を導入する。補正や明度、色バランスについては、環境の問題があり、補正が十分に可能な範囲でのバラツキはやむを得ない状況である。

このデジタル画像は、アート・リサーチセンターのアーカイブ機能を使って、高速に処理したうえで、保存用データとWEB公開可能な研究資料として、ネット上で共有することになる。デジタル撮影をすることで、120年も前に海外に流出した浮世絵を、複製デジタルデータとはいいながら、高解像度の画像として日本に持帰ることがで

きるだけでなく、世界中の研究者にこのプロジェクトへの参加を呼びかけることができる。したがって、通常は、長期間、場合によっては世代を超えて続ける必要があるために、実質上は整理不可能であった数の資料を、短期間で整理、カタロギングすることが可能となる。

さらには、本研究は、所蔵機関との共同作業であり、V&Aの収蔵品閲覧システムにのせることにより、デジタル画像や浮世絵研究の基盤となる必須情報をインターネット上に公開し、国際的な研究環境を用意するという目的もある。そのため、検索用文字データ(メタデータ)は、浮世絵検索システムとしては世界で初めて日本語版と英語版の二カ国語対応となる。

本研究が完了する2005年度までには、40000枚に及ぶ浮世絵作品のデジタル画像公開と流通実態に即した偏りのない資料を対象とした正確な作品カタログ情報による浮世絵ディクショナリ機能がWEB公開されることになる。つまりは、国際的な科学的浮世絵研究基盤が実現するということになろう。

5、デジタルアーカイブによる研究の展開

本研究では、上記の浮世絵調査を典型的な事例とするが、それに限定することなく欧米諸国と日本が文化的に交流する中での日本の書物や版画・摺物の国際的流通を探ることにある。

このプロジェクトを遂行するにあたって、デジタルアーカイブ技術を駆使することで、これまで不可能であった成果が上がることを目標としている。人文科学研究に対して情報技術が直接的に機能して大きな成果や効果を上げることができる、まさしく最適の課題であると考えている。これにより、結果として日本文化研究の新しい研究環境を用意し、新たな文化研究の価値観を発見できるという期待を持っている。

本研究では、展開研究として、3本の柱を立てている。それぞれの柱について、概略を述べる。

(1)電子閲覧システムによる世界共通の資料閲覧環境獲得

現在、アート・リサーチセンターには林コレクション・藤井永観文庫などを代表にして書や絵画など、知的エンタテインメント性の高い特殊コレクションが形成されつつある。これに欧米で人気の高い浮世絵や摺物などの出版物を加え、本学独自で、絵画の豊富な娯楽性の高い古典籍・出版物データベースをWEB公開している。この公開事業は、すでに浮世絵においては、第一に早稲田大学演劇博物館の浮世絵検索システムの開発への協力から始まり、次いで都立中央図書館の浮世絵閲覧システムなど、他機関所蔵浮世絵データベースの開発協力の上、それぞれの機関のサーバー上で公開してもらう事業を展開しており、上述のV&Aも、一連の事業と言える。図書館、美術館などの公的な組織だけでなく、個人コレクションについても、撮影・公開の事業が開始されており、2004年度からは、日本のコレクターだけでなく、海外のコレクター所蔵作品が、アート・リサーチセンターのデータベースから閲覧できるようになる。

この浮世絵の世界共通データベースによって、デジタルアーカイブが、机上の理想論ではなく、実質的な研究環境の革命へとつながることが明らかとなってきており、今後引続き古典籍についても、デジタルアーカイブ作業を展開していく。

(2)古典籍・古文書解読のエンタテインメント性開発

このプロジェクトのWEB公開資料は、すべてが著作権の切れた資料である。それゆえ、デジタル画像そのままの公開が可能となるが、資料のデジタルイメージだけが、手軽にみられても、それを活用することの可能な人間は、それほど多く存在しない。もちろん専門の研究者は、利用・解読可能であるが、専門家でも海外研究者にとっては最難関である。研究の裾野を広げるという意味で、直接的な研究成果とではないとしても、古文書やくずし字読解のエンタテインメント性を最大限に活用する教育システムを構築する必要がある。この分野での大きなニーズのひとつは、ここにあると感じている。教育システムにあたるさまざまな実験はされているが、せっかくWEBを通じて利用者のパソコンのモニター上に表示されるわけであるから、それと連動する実用的な古文書解読支援システムを開発したい。

(3)日本の書物や出版物に特徴的な絵画を豊富に含んだ素材によるエンタテインメント素材開発

たとえば、日本の絵画は「見立」という極めてゲーム性に富んだ知的遊戯によって構成されていることが多い。これらの素材を知的ゲーム性の読解を進め、エンタテインメント素材として蓄積し、日本文化を探る一要素としていく。また、浮世絵を中心として、すべての絵画は、そこに「画題」が存在している。江戸期において極端に増加した、出版物による絵画生産は、この画題にも大きな転換をもたらしており、極めて多くの画題が定着することとなった。これらを整理し、時代にそった解釈や解読を試みることで、現在失われた絵画の意味を究明することにつながるだろう。

また、歌舞伎や浄瑠璃など、物語や文学ではなく、舞台やパーフォーマンスを描いた作品も多い。現代においても上演される作品が多く、当時の絵画作品を通じて、アーカイブされた演技イメージが、現代によみがえってきて、時間と空間を超えて比較が可能となる。

これらは、絵画を使った多くのテーマの中のほんの一部分である。これらの研究対象が持つ豊潤な世界をさまざまな側面から解き明かしていくことが、この研究の最大課題となるであろう。

6、海外との研究協力

蛸壺型の研究に陥りがちな人文系の研究に、客観性や普遍性を持たせるため、また自己評価に都合がよいのが、海外研究者との交流や地域や社会連携の研究である。これまで学術的なものとされ、そのため大衆性を失い、極めて限定された享受者層を対象としていた古典籍や美術作品には、知的エンタテインメント性を付与する必要のあることが、これまでの国際交流・地域連携による研究によって実感できたきた。これらは、非常に価値が高いが、忘れられて行きがちな伝統・古典文化の価値を現代によみがえらせる研究である。

とくに、国際交流・協力の視点は、こうしたプロジェクト研究に参加している学生の教育や研究機会の増進のためには必須の要件であろう。現在、本プロジェクトでは、国際共同事業としては、展覧会企画を中心に据えており、次の展覧会の企画が動いている。

(1)大英博物館で開催される上方役者絵・摺物に関る展覧会の共同研究グループに参画し、展覧会のアレンジメント、エンタテインメント性の企画について分担する。

(2)2005年度に企画しているフランクフルト工芸博物館所蔵初期版画コレクションとARC所蔵合羽摺コレクションとの比較による浮世絵と彩色展覧会。

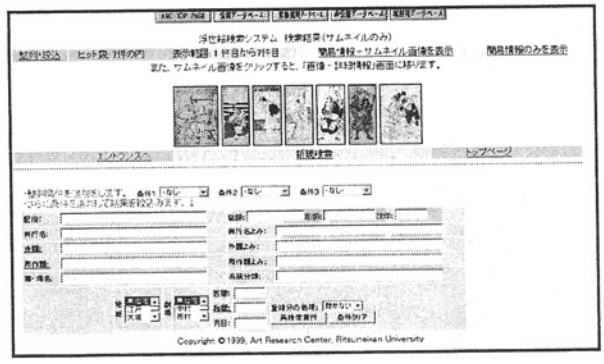
さらには、データベース完成と併せて、

(3)ヴィクトリア＆アルバート博物館所蔵浮世絵版画・摺物コレクションの日本里帰り展を計画中である。

ちなみに、2003年度は、京都において「忠臣蔵と見立て」展を開催し、国際シンポジウムに海外からの大勢の参加者を得、このプロジェクトの活動方向を江湖に知らしめることに成功した。

（参考）

浮世絵研究とWEB環境－2003年現在－

（2003.　7「浮世絵芸術」146号）

浮世絵検索システムのサムネイル表示と詳細解説表示